

## 成島柳北の米国体験—漢詩を手掛かりにして

具 島 美佐子\*

### Narushima Ryuhoku's Experiences in the USA : Taking Clues from his Chinese Poems

Misako GUJIMA

#### 抄録

成島柳北の海外体験は、従来、その旅行記「航西日乗」に基づいて論じられている。しかし、「航西日乗」の記述はヨーロッパ滞在中の記録に限られ、米国体験は見当たらない。ニューヨークからサンフランシスコまで南北戦争直後の米国を半月で足早に横断した柳北の眼には何が映り、その心には何が去来したのであろうか。本稿では、旅行中の漢詩を集めた「航西雑詩」中の米国で詠まれた作品を手掛かりに、彼の滞米中の足跡を辿ることを試みた。

#### Abstract

Narushima Ryuhoku's foreign experiences have often been discussed, based on his travel account 'Kosei Nichijo'. 'Kosei Nichijo', however, only records his journey through European countries, does not mention his stay in the USA. What caught his eyes and what occurred in his mind during his quick half-month travel from New York to San Francisco? This paper tries to follow his footsteps in the USA, taking clues from his Chinese poems collected in 'Kosei Zasshi'.

\* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程  
Doctoral Program  
Graduate School of Library, Information and Media Studies,  
University of Tsukuba

## はじめに

成島柳北（天保8年（1837）—明治17年（1884））は、幕藩体制下では奥儒者として『徳川實紀』の編纂にたずさわり、維新後はジャーナリストとしての道を歩んだ。漢詩にも造詣が深く、散文作品も創作していた。代表的な作品を以下に記す。

- ・『柳橋新誌』初編（万延元年（1860）成立 明治7年（1874）4月刊行）
- ・『航薇日記』（明治2年（1869）5月の山陽旅行 明治12年（1879）9月『花月新誌』82～117号に連載）
- ・『柳橋新誌』二編（明治4年（1871）3月成立、明治7年（1874）2月刊行）
- ・『航西日乗』（明治5年～6年（1872～73）の外遊、明治14年（1881）11月『花月新誌』118～153号に連載）
- ・『熱海文藪』（明治17年（1884）7月刊行）

柳北は幕末の『柳橋新誌』初編で花街の裏側を描き、『航薇日記』では山陽道の地方社会を、『柳橋新誌』二編では文明開化の浅はかさを描いて、徐々に社会の裏側への視線を深化させていった。海外体験を記した「航西日乗」は未完ではあるが、過去への追懐の念や日本の近代化への取り組みの必要性を読み取れる作品である。「航西日乗」中で柳北が最も描きたかったものを把握するのは、最後の訪問国である米国の記述がないことで不可能と筆者は考えていた。しかし外遊中の漢詩が「航西雑詩」（『柳北詩鈔』）としてまとめられており、米国滞在を残された漢詩から考察していくことが、柳北の海外体験を網羅的に探究することに直結すると判断し、本稿を作成した次第である。それを詠んだ状況や心情を解明していく研究が必要なのではないかと考えた。方法としては漢詩に込められた柳北の感慨を重視し、作品を分析し背景を考えることとした。

## 1. 柳北の米国滞在について

### 1.1 評価されなかった米国での体験

明治5年（1872）の陰暦9月13日<sup>1</sup>、成島柳北（天保8年（1837）—明治17年（1884））は石川舜臺や松本白華等と共に真宗大谷派の大谷光瑩（現如）に随行して、欧米へ旅立った。同行者は、現如も含めて4名であった。一行は横浜港から出発して陰暦10月末にはパリに到着、仏国（佛國）<sup>2</sup>、伊国（伊國）、英国（英國）を訪れて後、米国（米國）を経て翌年の陽暦7月に帰国した。

仏国滞在中の柳北について、前田愛は『成島柳北』の

中で「東西文化の共通項の発見を優先させるオプティミスティックな認識のパターン」<sup>3</sup>に柳北が支配されていたことを力説し、劇場や博物館に柳北が最も関心を払ったとしている。一方乾照夫は柳北の仏国での陶器製造所の見学について「西欧諸国の国力の源泉がその技術力と生産力にあることを看破した」<sup>4</sup>として、柳北が西欧諸国の工業技術に強い関心をもったとしている。このような先行研究は仏国や英国での柳北を中心になされてきた。前田も乾も散文の記述のない米国での柳北についての言及はない。マシュー・フレリは「成島柳北の洋行—『航西日乗』の諸コンテクスト—」<sup>5</sup>を著して、柳北の米国での体験を実証的に説明している。しかし柳北が米国で詠んだ漢詩については、ネブラスカ州のエルクホーン川での鉄道事故に遭遇した際の作品が唯一取り上げられているにすぎない。フレリも米国での柳北の感慨について深く掘り下げてはいないのである。最後にフレリは「柳北は、洋行中まだ帰国後の針路をはっきりとは把握していなかっただろうが、『航西日乗』に現れているのは、懐古的な感情ではなく、むしろ未来に向っての模索である。」<sup>6</sup>と語っている。このような結果を提示するには、米国での体験をもっと掘り下げた上で提示すべきと筆者は考える。かくして筆者は柳北の米国体験を漢詩を通じて考察する意義を痛感した。

### 1.2 米国滞在の概要

柳北の米国滞在から帰国については、マシュー・フレリによれば、6月1日ニューヨーク着、16日にサンフランシスコを出港して7月9日に横浜港着と推定されている<sup>7</sup>。また柳北の遺孫大島隆一は「ニューヨークへついてから、デトロイトを経て、シカゴへ寄り、サンフランシスコへと亜米利加の旅は、きはめてかんたんであつた。」と、その著作『柳北談叢』<sup>8</sup>の中で述べている。米国での滞在は短期間であったので、見学場所も非常に少なかったことは事実と考えられる。

ヨーロッパの国々では、「航西日乗」中の散文の記述に絶句が挿入されているが、米国での記録は「航西日乗」には全くない。「航西雑詩」中の漢詩だけが旅の足跡を物語っている。

柳北が滞在していた1873年当時の米国は、南北戦争（1861-65）が終結し、北部の資本が南部を組み込んだ形で経済を発展させた時期であった。柳北は大陸横断鉄道で米国を横断した<sup>9</sup>。途中、ネブラスカ州ではエルクホーン川を渡っていた時に、橋が崩れるという事故に遭遇した。死傷者は出たが、柳北は難を逃れた。やがて柳北は雄大な山河に接しながらロッキー山脈を通過してい

る。途中でバッファローを見たという僅かな記述が「航西雜詩」中に見られる。柳北はエルクホーン川の事故で命拾いをした後にも旺盛な好奇心からバッファローに注目したのであった。

さらにシエラ・ネバダ山脈をアメリカ横断鉄道で通過し、西海岸の都会サンフランシスコに到着した柳北は太平洋を渡り、帰国したのであった。米国での同行者は石川舜臺のみで、現地の道案内人については記されていないが、僅かな人数での大自然の中の旅行には不安もあったことは推測可能である。しかし柳北は唐代の李白や杜甫、『唐詩選』中の詩人たち、宋代の蘇軾や陸游、清代の袁枚や趙翼の作品に親しんでいたこともあり、雄大で厳しい自然を前にしても怯むことなく情感のある漢詩を残している。

## 2. 「航西日乗」未収録の漢詩

柳北の西歐での詩作は、訪問地への挨拶としての作品が多かった。しかし米国では挨拶代わりの作品よりも、柳北自身の心の底からの感動が詠まれている。柳北の没後、朝野新聞の漢詩欄の編集を行った大江敬香（安政4年（1857）—大正5年（1916））は「明治詩壇評論」<sup>10</sup>において、他の作者による海外体験の詩作よりも柳北の詩作を評価し、「眞に詩人的眼光を以て観察したるものは柳北に始まる」と述べている。敬香は柳北の欧米旅行中の優れた絶句15篇を掲げているが、そのうち7篇は米国での詩作であり、これらは「航西日乗」<sup>11</sup>には収録されず「航西雜詩」（『柳北詩鈔』）<sup>12</sup>にのみ収録されている。他は東シナ海から南シナ海にかけての洋上での1篇、アジア2篇、伊国の付近の洋上（シチリア海峡）での1篇、伊国1篇、英国1篇、大西洋上1篇、太平洋上1篇である。以下にそれらを記す。<sup>13</sup>

表1 大江敬香の評価した作品

国名等	題(詩鈔)	絶句とその創作月日
東シ海～南シ海洋上	「舟中雜誌十首」中の第八首	亞刺羅山在那邊。風濤森漫碧涵天。艙間併載牛羊豕。彷徨千秋諾亞船。（「航西日乗」陰曆明治5年9月22日）（「松本白華航海録」 <sup>14</sup> （原文）10月8日）「詩鈔」との異同 亞刺羅（惡刺羅）
支那（中国）香港	「香港二首」中の第二首	層々鉅閣競繁華。百貨如邱人語譁。此際誰來賣秋色。幽蘭冷菊幾盆花。（「航西日乗」明治5年9月20日）（「松本白華航海録」9月21日）（「航西雜詩」では「亞刺羅山在那邊。風濤森漫碧涵天。艙間併載牛羊豕。彷徨千秋諾亞船。」の後に配置）原文との異同 鉅（巨）華（美）夜熱侵入夢易醒。白沙青草滿前汀。故

安南（ベトナム） 塞昆（サイゴン）	「塞昆二首」中の第二首	園應是霜降節。驚看蠻螢大似星。（「航西日乗」陰曆明治5年9月25日）（「松本白華航海録」9月26日）（「航西雜詩」では「層々鉅閣競繁華。百貨如邱人語譁。此際誰來賣秋色。幽蘭冷菊幾盆花。」の後に配置）「原文」との異同 白沙青草滿前汀（尋涼艙上望）故園應是霜降節（回頭故國秋將晚）蠻（流）似（於）
伊国の近海	「過西々利海峡」	江山咫尺水烟含。明滅篝燈一二三。涼雨淒風人不語。征帆夜過墨西哥。（「航西日乗」陰曆明治5年10月25日）
伊国弗稜蘭（フロラン）	「遊多斯加納王故宮」	知有遺民記大家。當年一曲後庭花。石人不語春如夢。滿苑薜蘿夕日斜。（「航西日乗」陽曆明治6年3月25日）「詩鈔」との異同 苑（花）
英国倫敦（ロンドン）	「倫敦府雜詩」中の第一首	瀟車烟接瀟船烟。四望冥々不見天。忽地長風來一掃。倫敦橋上夕陽妍。（「航西日乗」陽曆明治6年5月19日）
大西洋上	「航大西洋之作」中の第一首。	經過東球三大洲。直將餘勇向西球。閣龍針路吾能認。山大風濤葉大舟。（「航西日乗」陽曆明治6年6月1日）
米国 ナイアガラの滝付近	「那耶哥羅觀瀑詩」	客夢驚醒枕上雷。起攀老樹陟崔嵬。夜深一望乾坤白。萬丈珠簾捲月來。（「航西雜詩」においては、「那耶哥羅觀瀑詩二首」の後に配置されているが、通常「那耶哥羅觀瀑」の詩として一般に知られているのは、この絶句である。）『日本漢詩』（下） <sup>15</sup> では、「那耶哥羅觀瀑詩」と掲載。『幕末明治体験詩集』 <sup>16</sup> では、「那耶哥羅觀瀑」と掲載。『明治漢文學史』 <sup>17</sup> では、「那耶哥羅觀瀑」と掲載。『明治漢詩文集』 <sup>18</sup> では、「那耶哥羅觀瀑」と掲載。『成島柳北 大沼枕山』（『江戸詩人選集』） <sup>19</sup> では、「那耶哥羅觀瀑詩二首」（うち一首として）として、以下を掲載している。匡廬猶覺小涓々。蔽日涵雲漲半天。絶勝誰能運仙筆。人間無復李青蓮。
ロッキー山脈付近	「過綠魁山」	崎嶇路在老巖間。落月斷雲相對閑。怪獸有聲人不語。火輪輾上綠魁山。（「航西雜詩」）午炎烘地夜亦蒸。警鐸敲醒夢一肱。向曉空山人患渴。停車爭嚼澗頭水。（「航西雜詩」）
鹽湖付近	「鹽湖二首」中の第一首。	隔岸螺螺収夕陽。晴瀾涵月鏡光涼。他年若憶鹽湖景。應是黃梁夢一場。（「航西雜詩」）
ネバダ山脈付近	「過寧婆陀山」	虬車奔勢勢如拋。征客坐捫栖鶴巢。夾路松杉皆百尺。瀟輪輾過最高梢。（「航西雜詩」）

達桑港 (サンフランシスコ)付近	「達桑港書喜二首」	瀛機雖疾客程長。毒熱酸寒子細嘗。鐵路三千三百里。今朝始望太平洋。(「航西雜詩」) 西來桑港似歸家。忘却家山萬里遐。蒼靄薰風好天氣。園々開遍杜鵑花。(「航西雜詩」)
太平洋上	「太平洋舟中之作四首」中第三首。	水滑天沈雨氣冥。孤帆無力度蒼溟。封姨驀地吹雲裂。滿目晴瀾月亦青。(「航西雜詩」)

これらの作品の中で、伊国の弗稜蘭（フロラン）<sup>20</sup>での詩作には李白の「蘇臺覽古」が踏まえられていて、統一前の王朝への追懐の念が詠みこまれている。<sup>21</sup>伊国は近代国家への道を歩み始めたばかりであった。また米国は南北戦争後に再統一されながらも、先住民族や黒人問題を抱えた国家であった。

米国での柳北の体験は残された絶句を手がかりに推測することが、唯一の手段でもある。従って、敬香の評価した7篇を中心としてそこに北軍のスコット将軍を称えた作品等も加えて、その背景等を考えることは、米国での旅行について理解することにも繋がると考えられる。具体的には作品の展開に重要だと考えられる語に注目し、柳北が親しんだとされる中国や日本の詩人の作品中での用例や、柳北自身の外遊前の作品中の用例と照らし合わせて、柳北の体験を考察した。また最後に、「游记」中の漢詩という観点から、「景」「史」「志」の要素が盛り込まれているかを表としてまとめた。

### 3. 雄大な自然の中で

#### 3.1 柳北「那耶哥羅觀瀑詩二首」と李白「望廬山瀑布二首」

ナイアガラ滝を見物し柳北は、雄大な瀑布を題材に「那耶哥羅觀瀑詩二首」（「航西雜詩」<sup>22</sup>収録）を詠んだ。

(a)

危巖迎瀑碎爲烟。 危巖瀑を迎へ 碎けて烟と爲る。  
烟迸兩飛斜照天。 烟迸り兩（雨カ）飛び 斜に天を照らす。

最是山靈逞奇幻。 最も是れ 山靈 奇幻を逞しくす。  
橫溪幾道彩虹懸。 橫溪 幾道か彩虹懸かる。

(b)

匡廬猶覺小涓々。 匡廬猶ほ覺ゆ 小さきこと涓々たり。  
蔽日涵雲漲半天。 日を蔽り雲を涵し半天に漲る。  
絶勝誰能運仙筆。 絶勝 誰か能く仙筆運ばん。  
人間無復李青蓮。 人間 復た李青蓮無し。

絶句 (a) (b) については、柳北が李白の「望廬山瀑布二首」を念頭に浮かべたと考えられる。李白の「望廬山瀑布二首」<sup>23</sup>は以下の内容である。

(c)

西登香爐峯，	西のかた香炉峰に登り
南見瀑布水。	南のかた瀑布の水を見る
挂流三百丈，	流れを掛くこと三百丈
噴壑數十里。	壑を噴くこと数十里
歛如飛電來，	歛として飛電の来るが如く
隱若白虹起。	隱として白虹の起つるが若し
初驚河漢落，	初めは驚く 河漢落ちて
半灑雲天裏。	半ば雲天の裏より灑ぐかと
仰觀勢轉雄，	仰ぎ觀れば 勢い転た雄なり
壯哉造化功。	壮なる哉 造化の功
海風吹不斷，	海風 吹いて断えず
江月照還空。	江月 照らせば 還た空なり
空中亂濺射，	空中に 乱れて濺射し
左右洗青壁。	左右 青壁を洗う
飛珠散輕霞，	飛珠 輕霞を散じ
流沫沸穹石。	流沫 穹石に沸る
而我樂名山，	而うして我は名山を楽しみ
對之心益閑。	之に対して 心 益ます 閑かなり
無論漱瓊液，	論ずる無かれ 瓊液に漱ぐことを
且得洗塵顏。	且つは得たり 塵顔を洗うを
且諧宿所好，	且つは諧う 宿てより好む所の
永願辭人間。	永しく願う 人間を辞せんと願うに

(d)

日照香爐生紫烟，	日は香炉を照らして紫煙を生ず
遙看瀑布挂前川。	遙かに見る瀑布の前川に掛かれるを
飛流直下三千尺，	飛流 直下 三千尺，
疑是銀河落九天。	疑うらくは是れ 銀河の九天より落つるか

柳北には外遊前にも瀑布を詠んだ漢詩(e)「李白觀瀑圖」があり、『寒檠小稿』<sup>24</sup>(卷一)と『柳北詩鈔』(卷一)に収録されている。柳北が李白の廬山の滝を見上げる絵に題した作品で、嘉永七年(1854)の作とされている。「李白觀瀑圖」が詠まれた頃の柳北は十代後半で、前年の父の死により家督相続をした時期でもあった。

(e)

天爲謫仙賦才多。	天謫仙の為に才を賦すること多く <sup>25</sup>
界破青山瀉銀河。	青山を界破して銀河を瀉ぐ
々々倒瀉萬雷吼。	銀河倒まに瀉ぎて万雷吼え
騰擲翠蛟躍白鼉。	翠蛟を騰擲し 白鼉を躍らしむ
謫仙瞥來聳毛髮。	謫仙 瞥ち來たりて毛髮聳ち

呼奇叫快舞且歌。 奇を呼び快を叫びて 舞ひ且つ歌ふ  
 百篇之詩一斗酒。 百篇の詩 一斗の酒  
 玉山頽欲壓盤渦。 玉山頽れて 盤渦を圧さんと欲す  
 君不見漁陽鼓轟如瀑布。 君見ずや 漁陽の鼓轟くこと  
 瀑布の如くし  
 潼關積屍山峩々。 潼関屍を積むこと 山峩峩たるを  
 一片白雲隔塵界。 一片の白雲 塵界を隔て  
 醉軒靜與泉聲和。 醉軒 静かに泉声と和す  
 嗚呼三千尺水今安在。 嗚呼 三千尺の水 今安くにか  
 在る  
 謫仙々去亦如何。 謫仙仙去して 亦た如何

李白像の絵画が日本に到来したのは室町時代とされており、李白像には「詩仙」としての像と、「酒仙」としての二つの系統のもの像があった。<sup>26</sup> この作品では李白の「酒仙」としての面よりも「詩仙」としての面が強調され、李白が「謫仙」という名称で登場している。「謫仙」は李白が賀知章によって「此れ天上の謫仙人なり」<sup>27</sup>と賞賛されたことによるものである。

米国での「那耶哥羅觀瀑詩二首」中の二番目の絶句 (b) の結句では、李白は「李青蓮」という名で登場している。「青蓮」は李白の号「青蓮居士」に拠るものであるが、「人間無復李青蓮」という部分は、「この世にはもう李白はいないのに」<sup>28</sup>という解釈がされている。「詩仙」である李白が人間社会の中になくなってしまったことを嘆いているのである。米国の雄大な自然を前にして、「詩仙」李白ならば自然を称賛できる卓越した詩を残したであろうというのが柳北の感慨であり、柳北は自己の才能に溺れることのない真摯な詩作の姿勢をとっていたと考えられる。

### 3.2 中国の詩人からの影響

柳北は日中にナイアガラの滝を見物した後、夜間になってからの滝の情景も作品に残している。

(f)

客夢驚醒枕上雷。 客夢 驚き醒む 枕上の雷  
 起攀老樹陟崔嵬。 起ちて老樹を攀じ崔嵬を陟る  
 夜深一望乾坤白。 夜深くして一望すれば乾坤白く  
 萬丈珠簾捲月來。 萬丈の珠簾 月を捲きて來る

(f) の絶句の大意は、「わが旅の夢も枕もとの雷の響きに驚きさめ、すなわち起き出でて、老木の枝にすがりつつ、けわしい山坂をのぼってゆくと、深夜というのに、見わたす限り天地も白く、万丈の珠すだれが、月光を捲きこんだように美しく輝いて、眼中にとびこんでくる」<sup>29</sup>

と考えられるのである。

柳北は独自の感性で今一度ナイアガラの滝を描いているのである。聴覚と視覚で捉えた滝の豪快さは、迫真性のある表現である。この作品は「那耶哥羅觀瀑詩」としてよく知られている。それは実景を忠実に描いただけではなく、柳北の優れた観察眼から絵画的世界が構築されて、雄大な自然を詠んでおり、また険しい山道を登っても滝を見ようとする感情の高ぶりも込められている。しかし独自の世界を描きつつも、柳北は中国の詩人たちの作品中の語を踏まえていた。下記の語釈は『日本漢詩』(下)の語釈の一部を参照し、『漢詩大観』での用例を付加したものである<sup>30</sup>。

- ・起句の「客夢」は旅の夢の意味であるが、蘇軾の「感旧詩」に、「車轂鳴枕中。客夢安得長」が見られる。
- ・承句の「陟崔嵬」は、険しい山道を登る意味であるが、詩経の周南、卷耳篇に「陟彼崔嵬。我馬虺隤」が見られる。「崔嵬」は李白の「金陵望漢江」や杜甫の「水閣朝霽奉簡雲安巖明府」の中でも用いられている。
- ・転句の「一望」は、みわたす限りの意味であるが、杜甫の「秦州雜詩」の第八には「一望幽燕隔。何時郡国開」が見られる。「一望」はまた蘇軾の「虔州八境圖八首」中の第五首「使君那暇日參禪。一望叢林一悵然。成佛莫教靈運後。著鞭從使祖生先。」にも見られる。柳北は杜甫や蘇軾の詩にも親しみ、それらから一望が可能な雄大な光景を評価していたものと考えられる。
- ・結句の「捲月來」の「捲」は簾の縁語として用いられていて、瀑流に月光が反射してきらめく情景を詠んでいる。陸游の「泊公安県」の、「無窮江水与天接。不断海風吹月來」が類似句として挙げられる。

柳北がナイアガラの滝を見物して詠んだ二つの絶句 (a) (b) よりも、夜の情景を詠んだ絶句 (f) の方が一般には「那耶哥羅觀瀑詩」としてよく知られている<sup>31</sup>。大江敬香が明治詩壇評論で評価したのも、この夜の情景を詠んだ絶句であった。柳北が親しんだ中国古典の詩人たちの作品中で使われた語が多数あり、李白の他に蘇軾、杜甫、陸游等の影響を柳北が受けていたことが推測できる。特に陸游については、信夫恕軒<sup>32</sup>が「文は袁隨園に似て、詩は陸劍南、趙甌北の風有り。」<sup>33</sup>と、その影響を指摘している。陸游の漢詩「泊公安県」は、蜀に入った際の旅の途中で詠まれたものである。

杜甫の「秦州雜詩」二十首については、華州司功參軍の地位を棄てて家族を抱えながら秦州（甘肅省天水市）にやって来た時に様々な事を詠じた二十首の群作である。第八首は「聞道尋源使」（『杜少陵詩集』巻七）である。

(g)

聞道尋源使。 聞道らく尋源の使、  
 従天此路廻。 天従りして此の路より廻る、と。  
 牽牛去幾許。 牽牛、去ること幾許ぞ、  
 宛馬至今來。 宛馬、今に至るまで來る。  
 一望幽燕隔。 一望、幽燕隔たる、  
 何時郡國開。 何の時にか郡國開かれむ。  
 東征健兒盡。 東征、健兒盡く、  
 羌笛暮吹哀。 羌笛、暮吹哀し<sup>34</sup>。

絶句 (g) では、「尋源の使い」としての張騫の故事を踏まえており、未知の異郷を旅する哀感が詠みこまれている。柳北もナイアガラの滝の近くに宿泊して、異郷の世界を目にした驚きから詩作をしたと考えられる。柳北は横浜港から出発する際に絶句を詠んでおり、その起句は「誰知豪氣掣鯨鯢（誰か知らん 豪氣 鯨鯢を掣ふるを）」である。杜甫の「未掣鯨魚碧海中（未だ鯨魚を掣せず碧海の中）」（戯爲六絶句・四）を踏まえたときされている。夜の滝の情景を詠んだ絶句 (f) は、柳北の中国の漢詩への造詣の深さを感じさせる点でも優れている。

### 3.3 国内の詩人への関心

杜甫の漢詩については、柳北は菅茶山（延享5年（1748）—文政10年（1827））の作品からも間接的に影響を受けていたと考えられる。渡欧前の明治2年11月1日（1869）「航薇日記」の中で茶山に言及している。それは藤戸という場所にある先陣菴という草屋について話を聞いた際、その草屋の名前については「この名ハ菅茶山集中に於て見たるとありし」と述べているからである<sup>35</sup>。

茶山は天台僧の六如（享保19年（1734）—享和元年（1801））を通じて杜甫の影響を受けたとされており、「茶山がもし六如から影響を受けたとするならば、六如の前半世における宋詩風の詩であるよりも後半生における杜甫風の詩であったと」<sup>36</sup>という指摘もある。従って柳北が杜甫風の詩を菅茶山等の先行文学からも知っていたという推測は可能である。

さらに絶句 (f) の承句で用いられている「陟崔嵬」は険しい山道を登る意味であるが、「崔嵬」という語も「航薇日記」中の詩作に見られる。柳北が四国での山登りの際に同行した岸田冠堂<sup>37</sup>という漢詩人と聯句を作った際に用いられている。

(h)

鬢鬚碧雲仙逕開 一蓑衝雨上崔嵬 柳北

山靈莫笑無桃樹 前度劉郎今復來 桐蔭

柳北は「航薇日記」の中で、冠堂について「其人のなり風致あり實に僻地に稀なる人物と感嘆に堪へず」と述べている。李白や杜甫のような中国の大詩人ばかりではなく、国内の詩人たちにも目をむけながら柳北は詩作に励んできたのであった。幕藩体制下では奥儒者であった柳北が、地方の民間人であった冠堂を評価したことはその作品からと考えられるが、柳北は門地にこだわらないで作品のみを評価する姿勢をとっていたと考えられる。

### 3.4 風景への関心

夜の情景を詠んだ絶句 (f) 中の語である「一望」は、杜甫の作品中に見られるが、柳北は国内の游记「航薇日記」<sup>38</sup>中の詩作にも「一望」という語を用いている。「航薇日記」は柳北が明治2年（1869）に大阪から山陽道、四国の一部を旅行した際の記録で、多くの漢詩も詠まれていた。以下に「一望」という語が詠みこまれた「航薇日記」中の絶句を記す。

(i)

一望寒村處々同。 一望すれば寒村處どころ同じ  
 黄雲刈盡水田空。 黄雲刈り盡して水田空し  
 木綿花吐荻花舞。 木綿花吐き荻花舞ふ  
 晴日人行風雪中。 晴日人は行く風雪の中

絶句 (i) は柳北が藤戸から児島に行く途中で、秋の収穫がすんだ後の水田やまわりの花々の光景を詠んだものであり、この絶句の前には「風景頗るよし」という記述がある。「航西日乗」の中で、柳北は仏国と伊国の国境付近でも「一望」という語を含む絶句を残していた。明治6年3月17日（1873）、早朝に柳北一行は国境ちかくのアンベリウ（Amberieu）という地点におり、山岳地方の光景を前にして以下の絶句を詠んだのである。

(j)

客身遠逐汽烟飛。 客身遠く汽烟を逐ひて飛ぶ  
 千里風光一望奇。 千里の風光 一望奇なり  
 來路未収紅旭影。 來路未だ収めず 紅旭の影  
 前山已濺雨霏々。 前山已に濺ぐ 雨霏霏

柳北はこの絶句 (j) の後に付近の光景について「是ヨリ右ニ山骨ノ稜々トシテ瀑布の潺々タル有リ 小湖時ニ現ジ隠レ 風景愛ス可シ」と、記している。国内でも海外でも、柳北は広大な眺めを一目で見られるような光景、すなわち「一望」することが可能な光景に、心を惹かれて詩作をしていた傾向があったと考えられる。

## 4. 古戦場での柳北

### 4.1 スコット将軍の評価

ナイアガラの滝の近くの米英戦争（1812-14）<sup>39</sup>の古戦場チッパワ（Chippawa）を訪れた柳北は、米国側のスコット将軍（Winfield Scott 1786-1866）の功績を称えた絶句「過蘇格都古戦場」を残している。米英戦争は1814年に勝負なしの講和が結ばれたことで終結したが、スコットの功績は米国が英国と対等に戦い得ることを証明したことにある。英国の支配に抗した米国の姿勢には柳北も共感したのであろう。

#### (k)

立馬林阜望古營。 馬を林阜に立てて古營を望む  
 當年陳述認分明。 当年の陳述 分明なるを認む  
 歸雲陣々來爭岫。 歸雲 陣々 來たりて岫を争ふ  
 飛瀑猶爲巨礮聲。 飛瀑 猶ほ為す 巨礮の聲

米英戦争の当時、未だ若かったスコットは軍服の調達ができなかったのがグレーの民兵服を正規兵に着用させて闘いに臨んでいる<sup>40</sup>。その後のスコットはメキシコとの戦争において勝利を導き、南北戦争ではバージニア州出身であったが北軍側で活躍した<sup>41</sup>。絶句(k)の結句「飛瀑猶爲巨礮聲」では、ナイアガラの滝の雄大な自然と同時に米英戦争でのスコットの活躍を称えていると考えられる。柳北にも武人としての経験があった。幕末に騎兵頭を勤め、乗馬には堪能であった。『柳北詩鈔』巻二、『春声楼詩抄』には「九月二十日率兵馬發太田營歸江城有感而賦（九月二十日、兵馬を率ゐて太田の營を発ち、江城に歸る。感有りて賦す。）」<sup>42</sup>という詩作もある。

『航西日乗』において、柳北は既に英国でウェリントン将軍（1769-1952）を称えた絶句「謁維靈敦之像（維靈敦の像に謁す）」を詠んでいるが、それはウェリントンの像に拝謁する形で詠まれており、ナポレオン一世の横暴を防いだ人物としての評価であった。

#### (l)

莫怪遺容凜有神 怪しむことなかれ 遺容の凜として  
 神有る  
 將軍功績足千春 將軍の功績 千春に足る  
 輪贏一決窪多路 輪贏 一決す 窪多路  
 擒得驕龍是此人 驕龍を擒え得たるは 是れ此の人

絶句(l)では、ベルギーのワーテルローの戦いについて「輪贏一決窪多路」と転句で詠んでおり、「輪贏」は勝敗の意味であった。しかし米国での古戦場見学の際には、近くにナイアガラの滝があるなどして、滝の音についての聴覚の世界の描写があつて、よりリアルな様相

が描かれている。従って米国での絶句(k)中の古戦場の見学の際の様相は、英国での絶句(l)中にはない臨場感がある。

### 4.2 米英戦争への関心

絶句(k)の「當年陳述認分明」の句では戦場の跡が歴史的遺産となっていることが述べられている。柳北が影響を受けたとされる清の趙翼（1727-1814）の「赤壁」中でも「今日経過已陳述」という用例があり<sup>43</sup>、また杜甫の「客舊館」中に「陳述隨人事」という用例がある。

「歸雲陣々來爭岫」の部分では、雲が山のほろ穴に先を争って切れ切れに帰っていく様相が詠まれている。「歸雲」については、陸游の「泊上虞縣」という詩の中にも「歸雲抱縣樓」として用いられている。杜甫の「返照」という詩の中にも「歸雲擁樹失山村」という用例がある。

『文選』中の潘岳による「西征賦」にも、「納歸雲之鬱鬱」という用例があった。『柳橋新誌』第二編の「後序」に、「若使樂廣藩岳是徒讀之必將棄其筆硯而却退陞若干車塵之間也（若し使樂廣藩学の徒をして之を讀ましめば、必ず將に其の筆硯を棄てて、車塵の間に却退陞若たらんとす）」<sup>44</sup>という記述がある。「後序」は清泉白石人が著したと記されているが、「初刷では白石人の後序が巻初に組まれている」<sup>45</sup>ことが指摘されており、柳北の文芸観をよく理解した人物が著したと考えられる。従って、柳北も潘岳の作品を評価していたと考えられる。さらに柳北が親しんだ日本の文人では寺門静軒<sup>46</sup>の『江戸繁昌記』初篇中の上野の部分に「歸雲抹靄」という用例がある。奥儒者の家の嫡子であった柳北が、幕末に流布を禁止されていた『江戸繁昌記』を愛読していたのは、その文学性を評価していたからであった。柳北の門地にとられない人間観がうかがえる。

次に「岫」については陶淵明の「歸去來辭」中に「雲無心以出岫」という用例がある。柳北は渡欧前の「航薇日記」中で以下の漢詩を残している。

#### (m)

朱袍換得綠蓑衣。 朱袍換へ得たり 綠蓑衣  
 休道沈淪心事違。 道休よ 沈淪心事違ふと  
 病鶴乘軒非所願。 病鶴軒に乗る 願ふ所にあらず  
 孤雲出岫有時歸。 孤雲岫を出でて 時有りて歸る  
 一聲鴻雁鄉書到。 一聲の鴻雁 郷書到り  
 千里江山詩伴稀。 千里の江山 詩伴稀なり  
 却是海南多樂土。 却是是れ 海南樂土多し  
 梁甘酒冽又魚肥。 梁甘酒冽又魚肥

詩(m)の中で「孤雲出岫有時歸。（孤雲岫ヲ出デテ時有りテ歸ル）」というのは、雲が本来の場所に帰るこ

とを述べている。また「航薇日記」中でも「却是海南多樂土。(却テ是レ海南樂土多シ)」と、南の島が樂土であることを称えている。柳北は寂寥感を「雲」と「岫」という語で表しつつも、最後は雄大な自然に心を動かされている。人生を楽しむ境地を肯定し、悲哀に徹していたわけではないことが推測できる。この詩について乾照夫は以下のように述べている。

これによると、柳北は「沈淪」した身の上にこだわりのつつも、敢えて仕官せず、俗世間から超然として生きる決心をもちたいとした。そうした中で、他郷にある孤独感、つねに故郷を思う心情を掻き立てるが、敢えて「樂土」を求めて漂泊したいとした<sup>47</sup>。

「航薇日記」中では、漂白の念に濃厚に支配されていた柳北であったが、米国では古戦場を見学したりしているうちに、次第に漂白への憧れは希薄になっていったと推測できる。その理由は「航薇日記」で描かれた「樂土」が、米国には存在しなかったのである。米国での柳北の絶句(k)では、転句の「歸雲陣々來争岫」の部分で「雲」と「岫」という語を使いながら、結句で「飛瀑猶爲巨礫聲」として、滝の雄大さを述べている。米英戦争という過去の歴史やナイアガラの滝という超越的な自然によって、柳北の中の「樂土」を求める漂白の念は霧散し、人間社会への関心が芽生え始めていたと考えられる。

## 5. 過酷な自然

### 5.1 命拾いの体験

柳北一行はネブラスカ州に達したが、エルクホーン川を渡っていた時に、橋が崩れるという事故に遭遇した。死傷者は出たが、柳北たちは無事であり、次の絶句を残した。

(n)

霹靂推人迫急湍。 霹靂 人を推して 急湍に迫る。  
 倏然萬膽一時寒。 倏然として 万胆 一時に寒し。  
 棧摧車覆儂無恙。 棧摧け車覆るも 儂恙無し。  
 笑唱青蓮蜀道難。 笑ひて唱ふ 青蓮の蜀道難。

絶句(n)での「青蓮」は、李白をさし、また樂府「蜀道難」は李白の代表的作品である。その最後の部分は、「蜀道之難、難於上青天、側身西望長咨嗟。(蜀の道の難きは 青天に上るよりも難し 身を側だてて西望し 長く咨嗟す)」と記されている。蜀(四川省)と長安(現在の西安、陝西省)の間をつなぐ山道が険しいことを詠んだものである。柳北は東部から西部への移動を、蜀から

長安へ行くことに擬えていたとも考えられる。さらに米国での命拾いの詩作の際にはまず「霹靂」という語から始めているが、これは陸游の青天の霹靂(「九月四日鷄未鳴起作」から)を踏まえたと考えられる。従って、この絶句(n)には陸游や李白という柳北の親しんだ詩人の作品が踏まえられている。

柳北が李白の「蜀道難」を踏まえた詩作は、渡欧前の作品にも見られる。明治4年(1871)の七言古詩「觀會津十六士自盡圖引(會津十六士自尽の図を觀るの引)」(『柳北詩鈔』卷三)中で、「一夫能當萬虎兕(一夫 能く當る 万虎兕)」の部分は、「蜀道難」の「一夫當關 萬人莫開(一夫 関に当れば 万人も開く莫し)」を踏まえたものとされている<sup>48</sup>。柳北は明治4年頃には未だ賊軍とみなされていた会津の白虎隊の悲劇を詠んだ作品を残していたのである。白虎隊の少年の勇猛さを「蜀道難」を踏まえて描いた部分は悲壮であるが、米国での柳北自身の命拾いに際しては、「蜀道難」の詩が旅行中の困難を克服した喜びを強調することに使われている。

柳北と親交のあった大沼枕山<sup>49</sup>には天保六年(1835)の作品に五言古詩「曉發箱根」(『枕山詩鈔』卷上)<sup>50</sup>がある。その作品中には「蜀道一何難 羊腸幾九拙」という句があり、柳北以外の日本の漢詩人にも李白の「蜀道難」を踏まえて詩作した用例が見られる。

マシュー・フレイリは、絶句(n)をアメリカ大陸横断中の「もっとも妙な詩」<sup>51</sup>と述べているが、その理由は記されていない。しかし筆者は最も柳北の感情が直接的に表現された詩と考えている。転句「棧摧車覆儂無恙」には、命拾いをした際の人間の素直な感情が表れており、結句「笑唱青蓮蜀道難」はほぼ実体験を詠んだと考えられる。李白の「蜀道難」を踏まえつつも、自分流に笑いを誘う表現とした点に、柳北の独創性が感じられる。

### 5.2 ロッキー山中

命拾いをした後で、柳北一行はロッキー山脈を過ぎたが、通過直後に以下のような絶句を詠んでいる。

(o)

崎嶇路在老巖間。 崎嶇たる路在り 老巖の間。  
 落月斷雲相對閑。 落月 斷雲 相對して閑かなり  
 怪獸有聲人不語。 怪獸 聲有り 人 語らず  
 火輪輾上綠巖山。 火輪 輾り上る 緑巖山

・起句の「崎嶇」は、山道の険しいさまを表している。蘇軾「和陶擬古九首」の二首目の詩に「崎嶇頌沙麓」の用例が、陶淵明の「歸去來辭」中に「亦崎嶇而經丘」の用例がある。



・承句の「落月」は、月が西に傾く様子を表している。陸游「宿石帆山下」の中に「落月銜山聞杜鵑」の用例がある。また「斷雲」は雲がきれぎれにある状態を表し、陸游「蘭亭道上」に「斷雲漠漠雨淒淒」の用例がある。

起句と承句で異郷の地の夕暮れの寂寥感を表し、転句と結句でピューマやコヨーテと考えられる獣の音が聞こえる中を、汽車が山を登る様相が劇的に表現されている。またこの絶句 (o) の後に次のような語句「緑山有奇獸似牛而大余親見之其名曰馬斧狼（緑山に奇獸有り。牛に似て大なり。余親から之を見る。其の名、馬斧狼と曰ふ）」が書き添えられている。バッファローは先住民族<sup>52</sup>の必需品でもあったが、1871年以降には大量に虐殺されていた<sup>53</sup>。先住民族と第七騎兵隊との間でリトル・ビッグホーンの戦い（1876年）が行われ、先住民族側が最後の勝利を取めたのは、柳北が滞在していた時期よりも三年後であった。柳北の滞米中は、未だ先住民族の勢力はさほど衰えてはいなかった頃でもあった。

やがて柳北一行を乗せた客車はロッキー山中で早暁を迎え、激しい喉の渇きを訴える苦しみを味わい、その苦しみの中での生きることへの意欲を以下の絶句で表している。

(p)

午炎烘地夜亦蒸。 午炎 地を烘き 夜も亦た蒸す  
警鐸敲醒夢一肱。 警鐸 敲いて醒ます 夢一肱  
向曉空山人患渴。 曉に向ひて 空山 人 渴を患ふ  
停車争嚼澗頭水。 車を停めて 争ひ嚼む 澗頭の水

・転句の「空山」は、人気のない寂しい山を表している。王維の「鹿柴」中に「空山不見人」という用例もあるが、杜甫の「憶幼子」の中に「澗水空山未知」という用例もある。さらに宋代では蘇軾の「次韻黃魯直見贈古風二首」の第二首目に「空山學仙子」という用例もある。

・結句の「澗頭水」は、谷間の水であり、柳北も含む汽車の乗客たちが先を争って水で喉を潤す様子が描かれている。谷間の水に近い表現として杜甫の詩「憶幼子」中に「澗水空山未知」とある。ここでの「憶幼子」は杜甫が安史の乱に際しての作品であった。

(o) と (p) の絶句から、柳北はロッキー山中での寂寥感や、厳しい自然との遭遇を自己の貴重な体験とし、中国の詩人たちの作品の用例を取り入れ、自己を見つめながら詩作をしていたのである。

### 5.3 緑河と鹽湖

柳北一行を乗せた汽車はやがてグリーン川 (Green River) を渡った。この川はアメリカ合衆国西部のワイオミング州、コロラド州、ユタ州を流れている。それらの州を通過した頃に以下の絶句を残している。

(q)

濃緑涵雲是緑河。 濃緑 雲を涵すは 是れ緑河  
爲誰新様染輕羅。 誰が爲にか 新様 輕羅を染むる  
縱然日夜東流去。 縱然として日夜東流し去るも  
難洗吾儂客思多。 洗ひ難し 吾儂の客思の多きを

・起句の「涵雲」は、湖水が雲をひたして天と連なっているような様相を表している。孟浩然の詩「臨洞庭」中に「涵虚混太清」という類似な表現が見られる。

・承句の「爲誰新様染輕羅」は、『玉臺新詠』巻九の「雜曲」中に、「爲誰新起鳳凰樓」という表現がある。柳北は中国、六朝時代の詩集である『玉臺新詠』にも親しんでいた。万延元年（1860）頃に創作した「新樂府二篇柳春三囑」中の第二首目の作品「舞衣薄」の中で「妾節貞兮西陵柏」という部分に、『玉臺新詠』巻十の「錢塘蘇小歌一首」中の「西陵松柏下」が踏まえられている<sup>54</sup>。

・転句の「縱然日夜東流去」は、緑河が日夜西方から東方に流れ去ったとしてもという意味であるが、『三體詩』巻一の司空曙「江村即事」中に「縱然一夜風吹去」という類似な表現が見られる。また「東流去」は杜甫の「成都府」中に「大江東流去」の用例がある。「大江東流去」の句については「川の流れについていうとともに、大きな時間の推移という」<sup>55</sup>という指摘がされている。

「成都府」は杜甫が成都紀行の最後に詠んだ作品であり、大江は長江（揚子江）を指している。柳北は緑河を揚子江に見立てて、絶句に詠んだと考えられる。「東流去」と類似した「東去」については、清の趙翼の「赤壁」に「大江東去有周郎」という用例がある。さらに蘇軾の「念奴嬌 赤壁懷古」は「大江東去」という句で始まっている。「大江東去」もまた時間の推移を表すと考えられる。柳北の「航薇日記」にも浪華城（大坂城）を見た際の絶句中に「片帆東去大牙傾」という用例がある。

・結句の「吾儂」は柳北自身のことであり、「吾儂」は「航西日乗」のセイロン近くの洋上で詠まれた絶句中にも見られる。

柳北が欧米に到達する以前、アジア地域のセイロン近くで詠み「吾儂」という言葉を詠みこんだ「航西日乗」中の絶句は以下のものである。

(r)

東望故山雲杳茫 東のかた故山望めば 雲杳茫  
 濤聲欲裂遠人腸 濤聲 裂かんと欲す 遠人の腸  
 怪他赤道炎燄地 怪しむ 他の赤道炎燄の地  
 添得吾儂鬢上霜 添へ得たり 吾儂鬢上の霜

この絶句 (r) の前には「此夜月明 金星ヲ望ムに赤キ火ノ如シ同行ト共ニ思郷ノ詩ヲ綴ル」という記述がある。ここでは燃え盛る炎のような暑さの中で、柳北が日本のことを思い出しているうちに、ふと気がつくとき髪が白くなっていったという旅の苦勞が述べられている。緑河の絶句 (q) 中でも望郷の念の強さを表すことに「吾儂」という表現がされ、谷間の氷で喉を潤したりする体験をした柳北は、緑河を通過してからようやく故郷に思いをめぐらす余裕がでてきたと推測される。また「儂」は一人称我の呉の方言である。エルクホーン川での鉄道事故での命拾いの際の絶句 (n) にも「棧擡車覆儂無恙」の用例があった。また蘇軾の「戲題坐山縣。用杜子美韻」の中には、「呉儂但憶歸」という表現があり、「吾儂」と類似な用例である。柳北は自分自身を強く打ち出す際に「吾儂」や「儂」という語を用いていると考えられる。

緑河を通過した柳北一行は、ユタ準州（後に州に昇格）の鹽湖（グレートソルト湖）の付近を通過した。鹽湖のあるソルトレーク・シティは、モルモン教徒がイリノイ州を追われてからユタ準州に逃げ、指導者ブリガム・ヤング（1801-1877）が中心になって建設した町であった。その地で柳北は以下の絶句を詠んでいる。

(s)

緑河太駛緑山危 緑河は太だ駛く 緑山は危し  
 看到鹽湖意轉怡 見て鹽湖に到れば 意転た怡らぐ  
 風月一灣晴更好 風月 一灣 晴れて更に好く  
 烟波萬頃兩還奇 烟波 萬頃 兩還た奇なり

- ・起句では雄大な河や山脈を経ての旅の苦難を起句で述べている。
- ・承句では鹽湖に到達してから、旅の苦難を心配する気持ちが和らいだことを述べている。
- ・転句ではその背景として晴れた中での一灣の自然の風景が表されている。
- ・結句では、水面が広々とした水面にもやのように波立つ様子を記して、その二つが珍しい光景であることを述べているのである。蘇軾の「次韻子由書王晋卿畫山水一首。而晋卿和二首」の第二首中に「萬頃滄波沒兩鷗」という表現があり、「烟波萬頃兩還奇」と類似している。さらに、鹽湖での夕陽を目にした柳北は、以下の絶句

を詠んでいる。

(t)

隔岸翠螺収夕陽。 岸を隔つる翠螺 夕陽収まり  
 晴瀾涵月鏡光涼。 晴瀾 月を涵して 鏡光涼し  
 他年若憶鹽湖景。 他年若し鹽湖の景を憶はば  
 應是黃梁夢一場。 應に是れ黃梁の夢一場なるべし

- ・起句の「螺」は、湖上に浮かぶ島山を指している。劉禹錫の「望洞庭」の中に「遙望洞庭山翠色 白銀盤裏一青螺」という用例がある。
- ・承句の「瀾」は大波の意味で、月が波に映っていて鏡のような湖面の様相を述べている。
- ・転句の「他年若憶鹽湖景」は、後年もしも鹽湖の風景を思うことがあればという意味である。蘇軾の「六月七日。泊金陵阻風。得鍾山泉公書。寄詩爲謝」の中に「他年若畫廬山圖」という用例がある。
- ・結句の「黃梁夢一場」は「邯鄲の夢」（『枕中記』）を指し、夢の中の異次元の世界を表現している。柳北はパリの滞在中でも絶句「雪中口占」の中で、「黃梁一未醒時」という表現をしている。旅行中の苦難を克服した柳北は、自然の雄大な美しさに感動し、鹽湖を洞庭湖に擬えたり、夢の世界での光景のようであると語っている。

#### 5.4 ネバダ山中

鹽湖を通過した柳北一行は、再び山岳地帯を横断鉄道で通過した。その時の光景を以下の絶句に詠んでいる。

(u)

虬車奔壑勢如拋。 虬車の壑を奔るは 勢拋つが如く  
 征客坐捫栖鷗巢。 征客 坐して捫づ 栖鷗の巢  
 夾路松杉皆百尺。 路を夾む松杉 皆百尺  
 瀟輪軋過最高梢。 瀟輪 軋りて過ぐ 最高の梢

- ・起句の「虬車」は、「虬」が龍の意味を表し、機械文明の力強さが表現されている。
- ・承句の「征客坐捫栖鷗巢」は、険しい山中なので、隼ノ巢もつかめそうだ」という意味である。自然は過酷なものではあるが、人間に身近なものとなっている。また陸游の「山行」に「上捫鷗鷗巢 下歷狼虎穴」用例があり、日本の詩人では枕山の「曉發箱根」中にも「崢嶸捫鷗巢。崎嶇經狼穴」という部分がある。柳北はロッキー山脈を越える際にも、絶句(o)で「崎嶇路在老巖間」と詠み、日本の同時代の詩人では枕山の作風の影響も受けていたと考えられる。
- ・転句「夾路松杉皆百尺」と類似の句は、『三體詩』卷

一の薛能の「柳詩」という絶句の中の「夾路春陰十萬營」の部分である。

- ・ 結句の「最高梢」は、杜牧の「襄陽雪夜感懷詩」の中に「莫止最高層」という類似した句がある。柳北は李白、杜甫、陶淵明、蘇軾、陸游の他に杜牧の作品にも親しんでいた。欧米への旅立ち以前に、柳北の「丁卯中秋患痢 枕上賦三律寄藤志州」という作品の第二首目の作品中で「樊川久絶停車興」という句がある。「樊川」は杜牧の号であった。

ロッキー山中を超える際にも過酷な自然との対決があった。そこでの自然は、人間に喉の渇きという苦しみを体験させる絶対的なものであった。しかしネバダ山中では、絶句 (u) の中で、険しい山道でも隼の巣がつかめそうだと述べられていて、自然と人間の距離が少し縮められている。

## 6. サンフランシスコから日本へ

### 6.1 サンフランシスコ到着

柳北一行はロッキー山脈やネバダ山脈、緑河や鹽湖を通過して遂にサンフランシスコに到達した。その安堵の気持ちが以下の絶句に表れている。

(v)

瀛機雖疾客程長。 瀛機 疾しと雖も 客程長し  
 毒熱酸寒子細嘗。 毒熱酸寒 子細に嘗む  
 鐵路三千三百里。 鐵路 三千三百里  
 今朝始望太平洋。 今朝 始めて望む 太平洋

- ・ 起句の「客程」は旅程の意味で、岑参の「送許子第帰江寧拜親寄王大昌齡」の中に「楚雲引帰帆 淮水浮客程」という用例がある。
- ・ 承句の「酸寒」はつらく苦しい様子を意味している。蘇軾の「次韻李芳直感舊」の中に「酸寒病守尤堪笑」という用例がある。
- ・ 転句の「三千三百里」は、実際の距離ではない。一里は四キロであるので、「三千三百里」では、大陸横断鉄道の営業距離よりも少ない。ここでは距離の長い旅であったことを表している。
- ・ 結句では「今朝始望太平洋」という表現の中に旅の終わりに近づいた喜びが隠された表現である。白居易の「盤屋縣北樓望山」の中に「今朝始見山」という類似の句がある。

サンフランシスコにおいて、柳北は二首目の絶句の中で率直に望郷の念を詠んでいる。

(w)

西來桑港似歸家。 西のかた桑港に來たれば 家に歸るに似たり  
 忘却家山萬里遐。 忘却す 家山 萬里遐かなるを  
 蒼靄薰風好天氣。 蒼靄 薰風 好天氣  
 園園開遍杜鵑花。 園園 開きて遍ねし 杜鵑の花

- ・ 起句の「西來桑港」は、西進してサンフランシスコに来てみればという意味であり、岑参の「磧中作」の中に「走馬西來欲到天」の句も西進を詠んだ句である。
- ・ 承句の「家山萬里遐」は、陸游の「過野人家有感」の中に「家山萬里夢依稀」という句がある。
- ・ 転句の「蒼靄」は、蒼い靄の意味であり、岑参の「終南山双峰草堂作詩」の中に「石門破蒼靄」の用例がある。また「薰風」は蘇軾の「皇太妃閣五首」の中に「薰風草木酣」の用例がある。
- ・ 結句の「杜鵑花」は「サツキ」の漢名であり、李白の「涇溪東亭 寄鄭少府諤」の中に「杜鵑花開春已闌」の用例がある。米国で詠まれた絶句の中に、花が咲いている様相が詠まれたのはサンフランシスコでの絶句 (w) だけである。柳北には「航薇日記」中でも、瑜伽山という山に登った際に、「躑躅と蘭とを多しとす真に一佳境といふべし」とその光景を記している。サツキも含めて躑躅の花が好きな花の一つであったと考えられる。また杜鵑の花が咲いている様相から、日本の自然の風物を思い出したことも有り得る。

大陸横断鉄道の旅で、柳北は過酷な自然と対決し克服してきた。日常の世界に戻った柳北は、まもなく帰国できることを喜び、明るい世界を描き出している。日本の国では可憐な野の花という自然の風物に親しんでいた柳北は、サンフランシスコでも同様に杜鵑の花という小さな自然の美を鑑賞している。帰国をひかえて心に余裕ができたからと考えられるが、自然は柳北にとってもはや対決し克服するものではなく、生活の中で愛でるものとなったのである。柳北は心の中で自然と和解し、融合していったと考えられる。

### 6.2 帰路

柳北の一行は客船で日本に向かった。無限な大海を航海することも柳北には貴重な体験であった。

(x)

水滑天沈雨氣冥。 水滑らかに 天沈み 雨氣冥し  
 孤帆無力度蒼溟。 孤帆 力無くして 蒼溟を度る  
 封姨鷺地吹雲裂。 封姨 鷺地に 雲を吹き裂く  
 滿目晴瀾月亦青。 滿目の晴瀾 月も亦た青し

- ・起句の「雨氣」は、陸游の「夕雨」の中に「雨氣挾龍腥」の用例がある。
- ・承句の「孤帆」は、李白の「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」の中に「孤帆遠影碧空盡」の用例がある。「無力度蒼溟」は杜甫「宿江邊閣」の中に「無力正乾坤」という類似した句がある。
- ・転句の「封姨」（封十八姨）は風の神の意味である。『酉陽雜俎』（続集卷三）には、以下の記述がある。  
玄微は、そこで悟った。あの女性たちの、楊という姓、李という姓、および色彩や衣服の不思議は、みな、いろいろな花の精であったと。緋の衣の、阿措という名の女人は、すなわち、安石榴であり、封十八姨という人こそ風の神であった。
- ・「驀地」はまっしぐらに進む様子を表している。
- ・結句の「滿目」は一面、見渡す限りの意味である。杜甫の「秦州雜詩 二十首」の第一首目に「滿目悲生事」という用例がある。

太平洋を客船は風雨に遭いながら進み、やがて天候がよくなり、波の青さで月まで蒼く見えるほどになったとこの絶句 (x) では述べられている。最初は力弱く進んでいた客船が、中国文学の世界の風の神（封姨）の力によって天が晴れ、まっしぐらに日本に向かう様子も描かれ、無事に帰国することを祈念する柳北の姿が感じられる。

## 7. 帰国後の柳北

### 7.1 帰国後の歩み

帰国後の柳北はやがて、ジャーナリストとしての道を歩むが、以下に帰国後まもない柳北の歩みを記す<sup>57</sup>。

明治7 (1874) 38歳 二月、『柳橋新誌』二編を山城屋から刊行。

四月、『柳橋新誌』初編を山城屋から刊行。

五月、京都にて『京猫一斑』を草する。

九月、『公文通誌』社主から招請されて社長となり、同紙を『朝野新聞』と改称。以後、『大久保忠真の美譚』等の「雑録」欄を中心に活躍する。★服部撫松の『東京新繁昌記』が山城屋から刊行。

明治8 (1875) 39歳 六月、政府『新聞条例及讒謗律』を公布。

八月、同条例制定を『朝野新聞』上で攻撃。新聞条例に違反したので東京裁判所に呼び出され、五日間の自宅禁固に処せられる。

八月、『辟易ノ賦』、十月『後辟易ノ賦』を『朝野新聞』に発表。

明治10年 (1877) には、詩文雑誌『花月新誌』を創刊するなど、柳北は文芸による日本の社会の近代化にも意欲をもった。

### 7.2 帰国後の詩作

帰国後の国内の游记に『熱海文藪』<sup>58</sup>がある。これは柳北の死の直前、明治17年 (1884) に出されているが、その中の「澡泉紀游」<sup>59</sup>では、山路の様相を「風景頗ル佳ナリ」として以下の絶句を詠んでいる。

(y)

雲岫猶看雨氣饒。 雲岫猶看雨氣の饒きを  
與丁雖疾路迢々。 與丁雖も疾しと路迢々  
胡枝花紫芒花白。 胡枝花は紫に芒花は白し  
山逕秋容未寂寥。 山逕の秋容未だ寂寥ならず

「雲岫」は雲のかかった山々を表し、「航西雜詩」中の米国での絶句 (k) 「歸雲陣々來爭岫」や、「航薇日記」律詩 (m) 中の「孤雲出岫有時歸」に類似した表現がある。絶句 (y) には寂寥感も感じられるが、山々の遙かな眺望や萩（胡枝花）や芒の花の風情を味わう境地の方がより強く感じられる。柳北の好んだ風景は、寂寥感をもちながらも、それを超越するような雲や山を一望できる遙かで雄大な眺めであり、「航薇日記」や「航西日乗」、『航西雜誌』中の詩作の作風からもうかがえる。大江敬香が評価した海外体験の作品中に米国での作品が7篇もあったのは、米国の歴史に関心を払い、雄大な自然に心底感動し、時には過酷な状況下でも生への意志をもっていたからである。そこには、漢文脈特有の「景と史と志をあわせて紀行の骨格とする手法」<sup>60</sup>があったのである。

## 8. 米国滞在中の作品とその意義

### 8.1 米国での漢詩の特徴

滞米中と日本への帰路の際の絶句を「景」「史」「志」が盛り込まれているか、以下にまとめた。「史」は訪問国米国の歴史を、「志」は志の高ぶりや感動を意味しており、明確に認められるものは「○」、それほど明確ではないが認められるものは「△」とした。

特に「史」の面で、柳北は米国のスコット将軍を評価するような、歴史や社会への目を養うことも体験した。それは権力者であった英国の専横に対して、抵抗する姿勢をとった米国そのものへの評価でもある。権力者側への横暴への批判は、後年の游记にも見られる。西郷隆盛

表2 内容からみた作品の整理

作品番号	景	史	志	作品番号	景	史	志
a	○		△	q	○		○
b	○		○	s	○		△
f	○		○	t	○		○
k	○	○	○	u	○		○
n	○		○	v	○		○
o	○		○	w	○		○
p	○		○	x	○		○

が狩猟を盛んに行ったので熱海一帯では鹿が激減したことが、「鴉のゆあみ」(『熱海文藪』)中で「猪鹿ノ鮮肉有レバ沽ハントスルニ土人云フ西郷様御出デノ度ニ日々山ニ遊獵ナサレ今ハ猪モ鹿モ至テ乏シ」と述べられている。欧米への旅立ち以前に柳北は、『柳橋新誌』第二編<sup>61</sup>を完成させており、権力者側の横暴な面と戦う姿勢は、「航西雑誌」の中で描かれた米英戦争のスコット將軍を称える絶句を残したことに表されているが、さらに後年の国内の游记の中にも受け継がれていったと考えられる。

また米国の自然との関わりについては、柳北はナイアガラの滝の雄大さに心底感動したが、次には山岳地帯での過酷な自然との対決を経験した。やがて緑河や鹽湖ではその美しさに感動し、最終地点のサンフランシスコでは花を愛でるほどになった。帰国を前に、柳北はまるで日本にいるかのように、心に余裕ができたのであろう。柳北は自然の風物である杜鵑の花と心穏やかに向き合い、日本で見ていた花々と同様な美しさを感じながら、米国での最後の日々を過ごしていたと考えられる。

絶句(a)から絶句(x)には、「景」「志」が詠みこまれ、特に(k)では「景」「史」「志」の全てが詠みこまれている。柳北は自然との遭遇で自己を見つめ続けており、鹽湖の景色については絶句(t)で「他年若憶鹽湖景。應是黃梁夢一場。」と、自己を客観的にとらえた上でこれからの人生を肯定的に考えている姿勢が読み取れる。また帰路の絶句(x)の転句「封姨驚地吹雲裂」には風の神に守られて日本への帰路を急ぐ柳北の姿がある。柳北は無事に帰還し、今後の人生を模索したかったからと考えられる。

## 8.2 漢詩からみた米国体験の意義

マシュー・フレーリは、「柳北は、洋行中まだ帰国後の針路をはっきりとは把握していなかっただろうが、『航西日乗』に現れているのは、懐古的な感情ではなく、むしろ未来に向っての模索である。」と述べている。筆者は未来への模索が「航西日乗」中に強く描かれている点

には同感である。しかし懐古的な感情も描かれていたと考えている。それは伊国での「遊多斯加納王故宮」という絶句に込められた前王朝への追懐の念に表されている。「航西日乗」には未来への模索と過去への追懐という二つの感慨が込められていると考えられるのである。

「航西日乗」では、柳北の相矛盾するような二つの感慨が共存している。しかし米国での漢詩によって描かれた世界は、雄大な自然の前の卑小な人間と、権力の横暴さと戦う尊厳ある人間であった。柳北は人間の弱さを痛感しつつも、国家社会を担う人間の強さにも感動した。さらに短い滞在期間で、未開の原野を含む大陸横断では柳北が逃避してきた美的世界(花街等)もなく、柳北は完全に自己と向き合う体験をした。自己と向き合うことで、柳北の将来への模索はより真剣なものとなったと考えられる。

滞米中の漢詩だけからでは、柳北がジャーナリストへの道を歩む決意を固めたことは論証できなかった。しかしスコット將軍を称えた絶句(k)から、国家社会への関心が高まったことを読み取ることができた。また過去への追懐と将来の模索は一見矛盾しているように思われるが、柳北には一体のものであった。柳北は文久3年(1863)に幕藩体制の旧態依然とした様相に抗議して狂詩を賦し、閉門となり、將軍侍講の地位を失った過去もあった。この頃から柳北は、国の近代化を真剣に考えつつ洋学を学んでおり、維新後の海外体験から近代化の意欲が強まり、再び生きる勇気を取り戻していったと考えられる。柳北の過去への追懐と将来への模索は、米国で自己と向き合う体験を通じて一層強いものとなっていった。

## 終わりに

柳北の海外体験を考察するためには、未完であった「航西日乗」の内容だけでは完全とはいえない。「航西日乗」に収録されなかった「航西雑誌」中の作品、特に米国での漢詩を視野に入れ、柳北が人生を前向きに考えることを方向付けた雄大な自然との遭遇も考慮する必要がある。さらに米国での漢詩と帰国後の散文作品や漢詩等との関わりを探究し、柳北にとって、海外体験の意義を再考する必要性を感じている。

最後に、本稿の作成にご指導を賜った松本浩一先生に心から御礼を申し上げたい次第である。

## 注

1. 維新政府による改暦は陰暦明治5年12月3日を陽暦6年1月1日とするものであった。「航西日乗」中の陰暦による月日の記載は明治5年(1872)11月21日迄である。以後は全て陽暦である。柳北は次の日の陰暦11月22日と書くべき部分には、「改暦十二月二十二日」と記している。(「航西日乗」『花月新誌』複製版 ゆまに書房 1974年)
2. 「航西雑詩」中には、国名の記載はないが、「航西日乗」中の国名は全て漢字表記(旧字体)である。仏国(佛國)はフランス、伊国(伊國)はイタリア、英国(英國)はイギリス、米国(米國)はアメリカ合衆国である。本論文中では新字体を用いている。
3. 前田愛『成島柳北』朝日新聞社 1990年12月20日 頁192。
4. 乾照夫『成島柳北研究』ペリかん社 2003年5月20日 頁118。
5. マシュー・フレアリ「成島柳北の洋行―『航西日乗』の諸コンテクスト―」(『國語國文』京都帝国大學國文學会 71(11) 所収)
6. 前出「成島柳北の洋行―『航西日乗』の諸コンテクスト」頁43。
7. 前出「成島柳北の洋行―『航西日乗』の諸コンテクスト―」頁6 参照。
8. 大島隆一『柳北談叢』1943年8月20日 昭和刊行會 頁174。
9. 1869年、東のユニオン・パシフィックと西のセントラル・パシフィックが連結、初の大陸横断鉄道が完成した。(猿谷要『西部開拓史』岩波新書 1986年1月 頁161 参照)。
10. 大江敬香「明治詩壇評論」(『明治漢詩文集』明治文学全集 62 筑摩書房 1983年8月) 頁323。
11. 「航西日乗」中の詩については、『花月新誌』(複製版 ゆまに書房 1974年)からの引用である。「航西日乗」は、後年柳北が主宰した詩文雑誌『花月新誌』に掲載され、その際に漢文で書かれていた原文が訓下文に書き改められた。連載は第118号～153号(明治14年11月30日～17年8月8日迄149号と152号を除く)であった。
12. 『柳北詩鈔』中の詩については、国会図書館の「近代デジタルライブラリー」からの引用であるが、以下にその書誌事項を記す。  
『柳北詩鈔』／成島柳北著 成島復三郎編／出版地 東京／出版者 博文館／出版年 明治二七年一月(一八九四)／形態 二四,三六,五二丁 一六センチ／装丁 和装／シリーズ名 寸珍百種 第三九編。
13. 前出「明治詩壇評論」(『明治漢詩文集』)。
14. 『松本白華航海録』真言史料集成 第11巻『維新期の真宗』抜刷 1975年参照。  
柳北の航海中の日記については、原本は散逸しているが、『松本白華航海録』のうち、9月11日から10月22日までの漢文日記の内容が「航西日乗」中の内容とほぼ同じであり、柳北の日記原文を松本白華が写したものと考えられている。  
(『海外見聞集』(新日本古典文学大系明治編 第5巻 岩波書店 2009年6月26日) 頁250 参照)。
15. 猪口篤志『日本漢詩』(下)(『新釈漢文大系』46) 明治書院 2000年10月20日。
16. 川口久雄『幕末明治海外体験詩集』大東文化大学東洋研究所 1984年3月1日。
17. 三浦叶『明治漢文學史』汲古書院 1998年6月15日。
18. 前出『明治漢詩文集』
19. 『成島柳北 大沼枕山』(『江戸詩人選集』第10巻) 岩波書店 2001年10月22日 頁157。
20. 弗稜蘭(フロラン)は、現在のフィレンツェ。
21. 前出「航西日乗」『海外見聞集』(新日本古典文学大系明治編 第5巻) 頁323の尾注 参照。
22. 「航西日乗」及び「航西雑詩」中の漢詩の書き下し文については、『海外見聞集』(新日本古典文学大系明治編 第5巻)を参照した。
23. 李白の作品は『李白集考注』全二冊(上海古籍出版社1998年)からの引用である。書き下し文については、『李白』(鑑賞中国の古典 16 角川書店1988年)を参照した。
24. 『寒檠小稿』の書誌事項は以下のようである。  
『寒檠小稿』四巻／安政四年(一八五七)以降の成立／十八歳から二十一歳までの作を年ごとに編んで四巻 全四四二首／柳北自筆らしい筆跡を含む／添削の跡がある。(国会図書館所蔵)
25. 書き下し文については、「新編 柳北詩文集」(『漢詩文集』新日本古典文学大系明治編 岩波書店2004年3月26日)を参照した。
26. 柴田就平「海を渡った李白像―中国から日本へ」(『アジア文化交流研究』関西大学アジア文化交流研究センター／編 4号 2009年 頁197-215) 参照。
27. 藤野岩友『中国文学小事典』高文堂出版 1997年5月。
28. 『成島柳北・大沼枕山』(『江戸詩人選集』第10巻)

- 岩波書店 日野龍夫校注 2001年10月22日 頁158。
29. 大意については、前出『日本漢詩』(下)、『新釈漢文大系』46)を参照した。
30. 前出『日本漢詩』(下) 頁528-529 参照。また他に中国詩人の作品の引用については『漢詩大観』索引共全5巻(1974年6月5日復刊 鳳出版) 参照。
31. 前出『明治漢文學史』の中で、三浦叶はこの作品を取り上げ「柳北の詩といえば、最も人口に膾炙しているのは、次のナイヤガラ觀瀑の詩であろう」と述べている。
32. 信夫恕軒(天保6年(1835)―明治43年(1910)) 旧因幡藩士、明治政府にも出仕し、教員としての人生を歩んだ。「性狷介、酒を嗜んで友とする人は少なかったが、成島柳北とは親しかった」とされている。(前出)『明治漢詩集』 参照。
33. 「成島柳北先生の碑」(「恕軒文鈔」(抄) 三編卷下(前出『漢詩文集』所収)) 頁335。
34. 本文、書下し文の引用は、『杜甫全詩集』第2巻(『続国訳漢文大成』鈴木虎雄/訳注 日本図書センター 1989年9月20日) 頁72 参照。
35. 先陣庵についての茶山の漢詩「先陣庵 庵在藤戸渡」は「六百年前舊戦營先登猶認艸菴名春潮一派通田瀟野菜花中海舶行」であった。(菅茶山先生著「黄葉夕陽村舎詩」文化壬申年歳鐫 皇都書林 汲古堂梓(『詩集 日本漢詩』第九巻 1985年11月 汲古書院 頁15))。
36. 『菅茶山 六如』(『江戸詩人選集』4) 黒川洋一 注 岩波書店 1990年5月28日 頁410の解説。
37. 岸田冠堂(童)は、医師で漢詩人、明治11年5月に56歳で没した。その人柄については「貧者よりは薬価をとらず、困窮者には金銭及食糧を与えて治療を施す等、医は仁術の諺を身をもって実行したる仁者である。詩学を広瀬淡窓に学ぶ。」の記述が『妹尾町の歴史』(妹尾町発行 1970年7月30日 頁260)に見られる。
38. 「航薇日記」は、『花月新誌』82号(明治12年9月28日)から117号(明治14年11月20日)に連載された。柳北が義兄戸川貫好の領地であった妹尾町を訪れ際の国内での游记である。「航薇日記」の引用は前出『花月新誌』(複製版 ゆまに書房)。
39. 米英戦争(アメリカ-イギリス戦争 Anglo-American War of 1812)については「ナポレオン戦争中アメリカでは、イギリスによるアメリカ海運の妨害や同国と北西部インディアンとの結びつきに対する反感から、対開戦論が強まり、1812年に宣戦した」との記述が『世界史小事典』(山川出版 2004年1月21日頁26)にある。尚、ここでの「インディアン」とは先住アメリカ人のことであるが、先住アメリカ人(Native Americans)については「主としてアメリカインディアンをさすが、エスキモー(イヌイット)、アリユートの先住民も含まれる」の記述が『世界史小事典』に見られる。
40. Graves, Donald E. (Donald Edward), 1949 —. 'Red Coats & Grey Jackets : The Battle of Chippawa, 5 July 1814.' Dundurn Press, Toronto & Oxford, 1994.
41. スコット及び南北戦争時の米国の軍隊については、「南北戦争以前のアメリカ軍士官の大多数は南部出身者によって占められ、ことにバージニア出身者が多かった。北軍の最初の司令官、ウィンフィールド・スコット將軍はバージニア出身で、後に南軍の司令官となったロバート・リー將軍に、同郷のよしみもあって、北軍司令官にならないかと交渉したこともあった。」の記述が『アメリカ自由と変革の軌跡』(デイビッド・ルー著 日本経済新聞出版社 2009年1月 頁117)に見られる。
42. 書下し文は、前出『成島柳北・大沼枕山』(『江戸詩人選集』第10巻) 参照。
43. 近藤光男『清詩選』集英社 2002年3月26日 頁289の尾注参照。
44. 本文は、『柳橋新誌・伊都満底草』(勉誠社文庫 青柳達雄/解説 1985年4月11日)、書下し文は、『江戸繁昌記・柳橋新誌』(新日本古典文学大系 第100巻 日野龍夫校注 岩波書店 1989年10月30日) 参照。
45. 前出『柳橋新誌・伊都満底草』の「解説」。
46. 『柳橋新誌』初編の自序で、柳北は「往日日有静軒居士者 著江戸繁昌記 備模八百八街之景状 勝場劇區無所不載 無所不説」(前出『柳橋新誌・伊都満底草』7頁)と『江戸繁昌記』を評価し、それに倣って『柳橋新誌』を著したことを述べている。『江戸繁昌記』は寺門静軒(寛政8年(1796)―慶応4年(1868))によって、柳北の誕生以前、天保二(1831)年に初篇が著わされていた。
47. 乾照夫「成島柳北の『航薇日記』について」(『東京情報大学情報文化学科創立10周年記念論集』2007年8月20日) 頁211。
48. 前出『成島柳北・大沼枕山』 頁95 参照。
49. 大沼枕山(文化15年(1818)―明治24年(1891))

は、尾張出身の大沼竹溪の子であり、永井荷風の外祖父鷺津毅堂の一族であった。「枕山は范石湖・楊成齋を宗とし、陸放翁・蘇東坡・黄山谷の長を學んで一家独自の風を拓き」と言われている。(前出)『明治漢詩文集』参照。

50. 『枕山詩鈔卷之上』は、『詩集 日本漢詩』第17巻 汲古書院 1989年4月)からの引用。
51. 前出「成島柳北の洋行―『航西日乗』の諸コンテクスト―」頁4。
52. 紀平英作『アメリカ史』(山川出版 1999年10月25日)では先住アメリカ人(インディアン)を先住民と表記しているの、この論文でもそれに倣った。
53. 猿谷要『西部開拓史』(岩波新書 1986年1月 頁184-188)参照。
54. 前出「新編 柳北詩文集」(『漢詩文集』)頁226の尾注参照。
55. 『杜甫詩選』黒川洋一編 岩波文庫 2008年11月5日 頁248。
56. 段成式『酉陽雜俎』4 今村与志雄／訳注 平凡社 東洋文庫 1994年1月10日 頁146。
57. 『成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集』(『明治文学全集』第4巻 塩田良平／編 筑摩書房 1969年8月30日)の「年譜」を参照。
58. 『熱海文藪』の書誌事項は以下のようである。前出『成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集』(『明治文学全集』第4巻)の「解題」参照。  
「柳北仙史 熱海文藪」一冊／四六判白色又は緑色ボール表紙／出版并發賣所伊豆國賀茂郡熱海村 世古六之助／賣捌所 東京銀座四丁目 朝野新聞社／編者 武内一郎(馬溪)／明治十七年七月三十日。  
所収の本文の掲載誌紙を以下に記す。  
「澡泉紀遊」(明治11年9月22日)「鴉のゆあみ」(14年1月25日)  
「なくもがな」(15年1月18日)「烟草の吸さし」(16年1月26日)  
「すげのを笠」(16年8月30日)「菅の小笠附言」(16年9月14日)  
「藥槽餘滴」(17年1月8日)「澡泉紀遊」が『花月新誌』である以外、他はすべて『朝野新聞』所載。  
「澡泉紀遊」は『花月新誌』では「澡泉紀游」と記され、『花月新誌』第54号から62号に連載されている。
59. 「澡泉紀游」中の漢詩は『花月新誌』第61号(複製版)から、「鴉のゆあみ」は前出『成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集』(『明治文学全集』第4巻)から引用。

60. 齊藤希史『漢文脈の近代』名古屋大学出版会 2005年11月28日 頁195。
61. 『柳橋新誌』第二編の創作の意図について、前出『江戸繁昌記・柳橋新誌』の「解説」に「薩長の田舎者を主体とする〈東京〉の客が文明開化を代表するのに対応して、柳橋は三百年の江戸文化の代表の役割を負わされたのである。〈東京〉の客が柳橋で我が物顔に振る舞うさまに、柳北は、粗野な文明開化の波が江戸文化の粹を蹂躪しつつある世相の縮図を見出して、憤りを禁じ得なかった。」との記述がある。

(平成23年4月21日受付)

(平成23年8月29日採録)